

共働き夫婦におけるスピルオーバーとコーピング

—夫婦を分析単位とした視点から—

黒 澤 泰*

Work-Family Spillover and Coping in Dual-Income Couples: Perspective on the Couple as a Unit of Analysis

Tai KUROSAWA*

I investigated the relationships among, and the influence of, work- and family-related variables (spillover, coping, depression) between husband and wife. The participants were 40 dual-income couples from northern and central areas of Japan. Paired *t*-test, analysis of correlation, and multiple regression analysis between husband and wife were conducted. My results showed that wives felt more family to work negative spillover and positive spillover compared with their husbands. Furthermore, there was a significant and positive correlation for dual-income couples between depression, family to work negative spillover and positive spillover. My results indicated that support for husbands would also be useful for wives and support for wives would also be useful for husbands. I suggest that in the future research is conducted into the behavior within couples regarding positive spillover situations.

key words: spillover, coping, depression, dual-income couples

問題と目的

研究の背景

価値観やライフスタイルの多様化する現代では、多様な役割従事は依然重要な課題である（太田，2006）。これらの研究は、多重役割研究と呼ばれ、「一人の人間が仕事役割や家庭役割など、複数の役割に従事すること」と定義されている（福丸，2003a）。多様な役割従事の中でも、仕事役割と家庭役割の両立に関しては、志向する人が増加している一方、その状況における困難をいかに克服していくかの知見は十分ではない（加藤・金井，2006）。特に、小さな子どもや介護の必要な親と同居している労働者の場

合は、仕事と家庭の役割の調整が難しく、コンフリクト¹⁾が生まれやすい（渡井・錦戸・村嶋，2006）。従って、その状況における困難をいかに克服していくかの知見を蓄積することには、子育て支援の観点からも労働者支援の観点からも重要であると考えられる。

仕事と家庭の関係性を示す概念

スピルオーバー (spillover) 仕事と家庭の関係性を示す概念としては、スピルオーバー研究 (spillover: 流出) がある。これは、「一方の役割における状況や経験が、他方の役割における状況や経験に影響を及ぼすこと」と定義されており（Crouter, 1984; 福丸，2000，2003a，2003b; 小泉，1997，

* 東北大学大学院教育学研究科

Graduate School of Education, Tohoku University, 27-1 Kawauchi, Aoba-ku, Sendai-shi, Miyagi 980-8576, Japan

e-mail address: tai9630@gmail.com

¹⁾ なお、仕事と家庭の間のコンフリクトに関して、研究によっては、葛藤（例：加藤・金井，2006）という表現を用いているものもある。しかし、本研究の表記は、コンフリクトという表現で統一する。

2003 など), 仕事と家庭を両立することのネガティブな側面とポジティブな側面の両方に注目した概念といえる。スピルオーバー研究では, 仕事と家庭の間のネガティブな影響 (例えば, 仕事で嫌なことがあると, 家庭でもイライラする) は, ネガティブ・スピルオーバー (NS), ポジティブな影響 (例えば, 仕事が予想以上にうまく進むと, 家庭でも気分がいい) はポジティブ・スピルオーバー (PS) と定義され (福丸, 2000; 伊藤・相良・池田, 2006), 要因検討やアウトカム検討などの知見が積み重ねられている (小泉・菅原・北村, 2001; Grzywacz & Marks, 2000)。共働き夫婦の父親と母親を対象とした小泉他 (2001) の研究では, 仕事から家庭への NS は, 抑うつ度, 夫婦関係の質, 子育てストレスに悪影響を与えることが示されている。福丸 (2000) の研究では, 父母ともに PS の高さと抑うつ度の低さ, 仕事から家庭への NS の高さと抑うつ度の高さとの関連が示されている。また, 働く親の行うコーピング²⁾とスピルオーバーに着目した黒澤・加藤 (2010b) は, 割り切ったりあきらめたりする問題放置的なコーピングの使用と NS の高さ, 問題解決や相談などの積極的なコーピングの使用と PS の高さに関連が見られたことを報告している。

コンフリクト (conflict) 同様に, 仕事と家庭の関係性を示す概念として, コンフリクト研究 (conflict: 葛藤) も存在する。これは, 「仕事役割からの圧力と家庭役割からの圧力が相互に矛盾するときに生じる役割内葛藤」と定義されている (Greenhaus & Beutell, 1985)。これは, 仕事と家庭を両立することのネガティブな側面にのみ注目した概念といえる。

仕事と家庭のコンフリクトとコーピングの研究に注目した Matsui, Ohsawa, & Onglatco (1995) の研究では, 日本人の働く母親を対象に研究を行い, 家庭役割の再定義を行うコーピングが仕事と家庭のコンフリクトに関して効果的であったことを示している。また, Aryee, Luk, Leung, & Lo (1999) の研究

では, 香港の働く親を対象に, 家庭から仕事へのコンフリクトと仕事満足度との関連において, 情動焦点型コーピングが緩衝効果を持っていたことを示している。加藤・金井 (2006) の研究では, 仕事と家庭のコンフリクトに対して, 特定のコーピングの生起とその緩衝効果を想定して研究を行い, ワーク・ファミリー・コンフリクト (Work Family Conflict: WFC) に対しての行動である WFC 対処行動尺度が作成されている。この尺度は, 「夫婦でスケジュールを調整して, 仕事や家事をこなす」などの項目から構成される「夫婦間役割調整対処」, 「家事を手抜きする」などの項目から構成される「家庭役割低減対処」, 「親としての役割を果たそうと努力する」などの項目から構成される「家庭役割充実対処」, 「仕事の量を減らす」などの項目から構成される「仕事役割低減対処」の 4 因子構造から構成される。しかし, 「仕事役割低減対処」は, 他の下位因子に比べて低い α 係数を示し, 内的一貫性の観点から使用されていない。したがって, WFC 対処行動尺度は, 個人が行う対処の中でも, 「仕事役割低減対処」を外した夫婦間と家庭役割の調節に着目した尺度となっている。この研究では, 仕事と家庭の両立状況において, 役割を夫婦で調整したり, 期待される家庭役割に積極的に取り組むという前向きなコーピングが行われ, これらが個人の精神的健康に影響を及ぼすことを明らかにしている。

分析単位としての夫婦 (couple as a unit of analysis)

これら, スピルオーバー, コンフリクト, コーピングの先行研究は, 個人という分析視点から働く親を捉えている。しかし, 加藤・金井 (2006) では, 仕事と家庭のコンフリクト, およびそのコーピングを, 個人内のプロセスにとどめず, 仕事領域や家庭領域での他者との関わりも含めてとらえる視点が必要であるとし, 特に夫婦ペアでの検討は不可欠だと指摘している。この点に関連して, Hammer, Allen, & Grigsby (1997) は, 夫婦を分析単位 (couple as a unit of analysis) とした研究の必要性を述べている。夫婦を分析単位とした研究を考慮に入れるのであれば, 二者間を考慮に入れた概念を検討する必要がある。Hammer et al. (1997) などによって見いだされた, 二者間の相互影響は, クロスオーバー (crossover) と呼ばれ, その特徴や影響過程が West-

²⁾ 同様に, この領域に関しても, 対処という表現 (例: 加藤・金井, 2006, 2007) とコーピング (Lazarus & Folkman, 1984=1991) という表現 (Matsui, Ohsawa, & Onglatco, 1995; Aryee, Luk, Leung, & Lo, 1999) を用いているものがある。本研究では, 尺度名と因子名を除き, コーピングという表現で統一する。

man (2001) によって整理されている。Hammer et al. (1997) の研究では、399 組の共働き夫婦を対象に、仕事と家庭に関する変数が、自身に与える影響とその配偶者に与える影響を調査している。その結果、ある個人の仕事と家庭のコンフリクトの高さは、その配偶者の仕事と家庭のコンフリクトの高さを予測するという結果が示されている。Westman (2001) は、クロスオーバーを「二者関係において、一方の体験するストレスとストレインが、他方にも同じ体験をもたらすという個人間プロセス」と定義している。加藤・金井 (2007) の研究では、これを援用し、ワーク・ファミリー・コンフリクトの夫婦間クロスオーバーを「夫婦関係において、一方の体験するワーク・ファミリー・コンフリクトとそれに伴う満足感および精神的健康が、他方にも同じ体験をもたらすという夫婦間プロセス」と定義している。この研究では、仕事と家庭の関係性とそのコーピングを夫婦ペアの視点から検討しており、妻の夫婦間役割を調整するコーピングは、妻自身と夫の結婚満足感を高め、夫のコーピングは夫自身の結婚満足感を高めるという結果が示されている。

本研究の目的

しかし、これら先行研究には以下に示すような問題点があると考えられる。1 つ目の問題点は、スピルオーバー、コーピング、精神的健康の 3 側面を含めた視点で、共働き夫婦における夫と妻の相互影響が明らかにされていない点である。特に、仕事と家庭のコンフリクトに対するコーピングは、加藤・金井 (2007) を除いては、コーピングをする個人のみの分析視点からとらえられている (Matsui et al., 1995; Aryee et al., 1999; 加藤・金井, 2006)。しかし、Hammer et al. (1997) が指摘するように、共働き夫婦内での、夫と妻双方が与え、受ける影響を考慮する上で、夫婦を分析単位とする必要性があるだろう。この点に関しては、黒澤・加藤 (2010a) は、Relationship-Focused Coping という概念を紹介し、コーピング研究において、二者間（コーピングする側とコーピングされる側）に焦点を当てることを主張している。特に、共働き夫婦では、個人が行う自身のためのコーピングは、配偶者に影響する可能性が予測される。例えば、夫が職場での愚痴を妻にこぼすというコーピングは、愚痴をこぼされる側である妻に対して何らかの影響を及ぼすかもしれない。

O'Brien & DeLongis (1997) では、他者に対して不快感を抱かせるコーピングは、他者からのサポートを減少させ、本人を孤独へ導き、その結果、本人の精神的健康を損ねると先行研究をまとめている。また、O'Brien, DeLongis, Pomakim, Puterman, & Zwicker (2009) の研究では、ステップ・ファミリー (stepfamily) の夫と妻を対象にして研究を行っている。ステップ・ファミリーとは、「夫婦の一方あるいは双方が、前の配偶者との子どもを連れて再婚したときに誕生する家族」である (ステップ・ファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン, 2011)。ステップ・ファミリーでは、配偶者との関係と子どもとの関係を同時に維持しなければならず、緊張が維持されやすいとされる (O'Brien et al., 2009)。その中で、“相手の視点に立って、物事を見ようとする”ことや“相手の話に耳をかたむけることで、助けようとする”ことなどの共感的応答 (empathic responding) の使用が、夫婦の緊張の低減に関連することが示されている。これらの研究は、この領域において、夫婦を分析単位とする必要性を裏づけているものであろう。

2 つ目の問題点は、両立のポジティブな側面の夫婦間の関連が検討されていないことである。先行研究では、両立のネガティブな側面の夫婦間の関連は調べられている (Hammer et al., 1997; 加藤・金井, 2007)。これは、クロスオーバーのモデルが、コンフリクト・モデルにそっていることからきているのであろう (Westman, 2001; 加藤・金井, 2007)。

しかし、福丸 (2000) は、仕事と家庭の両立はマイナス面ばかりでなく、子どもに支えられて仕事を頑張ることが、結果的にプラスの要素を持つ可能性を報告している。仕事と家庭の両立のネガティブな側面とポジティブな側面が異なる因子として抽出された先行研究 (福丸, 2000, 2003b; Grzywacz & Marks, 2000) を考慮しても、両立のポジティブな側面が夫婦でどのように関連するのかということを調べる必要性があるだろう。

以上の問題点を解決するため、本研究では、仕事と家庭の両立に関する変数として、両立のネガティブな側面とポジティブな側面を調べるスピルオーバー、仕事と家庭のコンフリクトへの行動としてのコーピング、精神的健康の変数を、配偶者のそれと夫婦ペアにして考慮する。この、夫婦を分析単位と

した視点により、共働き夫婦における夫と妻の間の相互影響を明らかにすることを目的とする。これにより、夫婦間の関係を3つの変数から特定することが可能になると考える。特に、両立のポジティブな側面であるポジティブ・スピルオーバーの夫婦間の関連に注目する。その際、社会的要請や支援の必要性を考慮する上で、仕事と家庭の両立に対して、夫と妻双方がある程度の困難を感じている夫婦を対象にする。

本研究では、精神的健康の指標を表す指標として「抑うつ」を用いる。抑うつは、個人の精神的健康を測る代表的な指標である(坂本, 1998)ばかりでなく、抑うつ者とその配偶者の葛藤的な相互作用(interaction)が示唆されている(Coyne, Kessler, Tal, Turnbull, Wortman, & Greden, 1987)。Coyne et al. (1987)の研究では、抑うつエピソードの患者の配偶者の40%が臨床的介入を必要としていると示している。抑うつ度の高い患者は、社会生活へ興味を失い、絶望感を感じている。そのような患者との相互作用により、その配偶者は精神的健康に悪影響を受けるのではないかとCoyne et al. (1987)は考察している。また、抑うつ度は、多重役割領域の先行研究(福丸, 2000, 2003b)でも用いられていることから、本研究においての使用は適切であると判断した。

方 法

調査時期と調査対象

2009年11月から12月に、関東地方の保育園(A園)と幼稚園(B園)に協力を得て、子どもを通して質問紙を416組(832部)配布した。また、2010年5月~6月にも同じ内容の質問紙を、東北地方の保育園(C園)に協力を得て、31組(62部)配布した。配布物は、依頼状と夫婦別々の質問紙である。なお、回答に際して他の人と相談せずに自身で回答することを、質問紙の表紙と配布資料を通して依頼した。質問紙は、夫と妻で別々に記入を行い、封をした上で、園の回収箱に提出をしてもらった。それぞれの質問紙には、番号が振ってあり、夫婦の特定ができるようになっていた。夫婦ペアで回収したのは、そのうち81組(18.1%)であった。A園では29組(回収率10.5%)、B園では36組(回収率25.7%)、C園では16組(回収率51.6%)を回収し

た。質問紙は、すべての在園児に配布したため、複数の兄弟が就園している場合は、一家庭に複数の質問紙が届くことになった。その場合は、1部のみの回答を求めた。したがって、実際の家庭数から見た本調査の回収率は、18.1%より高いことが見込まれる。

問題と目的にそい、妻が専業主婦と回答した23組、夫婦どちらかの質問紙の回答に欠損がある21組、夫婦どちらかが「(両立に)全く困っていない」と回答した9組などを分析から除いた(これらの条件の複数に当てはまる夫婦も存在した)。「(両立に)全く困っていない」を選択したものを除いた理由は、仕事と家庭の両立に、「全く困っていない」場合、それに引き続く行動であるコーピングを尋ねるのは適切ではないと判断したからである(黒澤・加藤, 2010b)。

分析対象は、夫と妻両方が働いており、それぞれの質問紙の項目において欠損がなく、双方が、仕事と家庭の両立にいくらかの困難を感じている40組(夫: $N=40$, 妻: $N=40$)の夫婦であり、有効回答率は、8.9%であった。A園からは、23組(有効回答率79.3%)、B園では5組(有効回答率13.8%)、C園では12組(有効回答率75%)が分析対象になった。全体的には少ないが、このデータは厳密にスクリーニングされた共働き夫婦のデータだといえる。

質問紙の内容

フェイスシート 性別、労働時間(週間)、育児時間(週間)、職業形態、職種などを尋ねた。これらの質問は、福丸(2003a)を参考にした。また、就業形態、勤務状況、同居者などから判断し、労働時間と育児時間をスクリーニングした(例: 常勤とチェックを入れた対象者で週間の労働時間が15時間未満を目安にして削除した。この理由としては、15時間未満は他の常勤職が答えた週間の労働時間より2SD以上離れていたためである。育児時間で150時間以上を書いていたものは削除した。この理由としては、1週間は168時間しかなく、そのうち150時間を育児に使っているとは考えにくかったためである)。

仕事と家庭のスピルオーバー尺度 仕事と家庭の役割の間のネガティブな側面とポジティブな側面を把握するための尺度である。この尺度は、仕事と家

庭の関係を、方向（仕事から家庭/家庭から仕事）と属性（ネガティブ/ポジティブ）でとらえる尺度である。福丸（2000）の尺度は、1:「そのとおりである」～5:「ちがう」までの5件法であったが、本研究では、3:「どちらでもない」を抜き、「全くない」「ほとんどない」「たまにある」「かなりある」の4件法に変更した。

この尺度は、項目1から項目6が「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー：家庭から仕事へのNS（項目例：家事や仕事のために 仕事役割が思うように果たせない）」、項目7から項目12が「ポジティブ・スピルオーバー：PS（項目例：仕事でうまくいっているの で 家にいるときも気分がいい）」、項目13から項目17が「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー：仕事から家庭へのNS（項目例：仕事がきついの で 家にいるときもイライラする）」の3因子構造である。項目18（仕事よりも家族との時間をもっと大事にしたい）は、福丸（2000）では、分析から除かれており、本研究でもそれになった。なお、福丸（2000）の研究では、因子分析の結果、ネガティブ・スピルオーバーは、仕事から家庭/家庭から仕事と2方向に分かれたが、ポジティブ・スピルオーバーは、方向性が分離しなかった。

各因子のCronbachの α 係数は、それぞれ、家庭から仕事へのNS（夫： $\alpha=.83$ 、妻： $\alpha=.72$ ）、両役割のPS（夫： $\alpha=.81$ 、妻： $\alpha=.82$ ）、仕事から家庭へのNS（夫： $\alpha=.73$ 、妻： $\alpha=.74$ ）であった。 α 係数が.70以上の一定の値を示したこと、また、先行研究（福丸、2000、2003b）で未就学児を育てる父親と母親を対象として使用され、一貫した因子構造が現れていることから、本研究でも、福丸（2000）の因子構造をそのまま採用した。それぞれ、1点から4点の得点をつけ、因子ごとに平均を求めた。

コーピング尺度 コーピング尺度の前に、仕事と家庭の両立に対する普段の困り度を把握するために、「あなたは、仕事と家庭の両立に対して、“普段”どの程度困っていらっしゃいますか？」と尋ねた。これは、ストレスナーに対する個人のコントロール可能性を、仕事と家庭の両立困難の文脈において調べるためである。この質問に対して、「全く困っていない」「ほとんど困っていない」「やや困っている」「かなり困っている」の4件法で回答を求め、それ

ぞれ、1点～4点で得点化した。問題と目的で示したように、本研究では両立において、双方がある程度の困難を抱える共働き夫婦を対象にしている。したがって、1:「（両立に）全く困っていない」を夫か妻どちらかが回答した場合は、分析から除いた。

コーピングを測定する尺度としては、小杉・田中・大塚・種市・高田・河西・佐藤・島津・島津・白井・鈴木・山手・米原（2004）の短縮版コーピング尺度を用いた。この尺度は、積極的に対応し問題を解決しようとする「問題解決：9項目（項目例：自ら積極的に行動した）」、問題に対してあきらめたり割り切ったりしようとする「問題放置：9項目（項目例：この状況は変えられないと思った）」、専門家や周りに相談したりしようとする「相談：4項目（項目例：似た経験を持つ人に相談した）」の3因子構造である。「あなたは、仕事と家庭の両立に困ったとき、以下に示すような行動をどの程度とりましたか？」と教示し、それぞれの項目に対して、「しなかった」「ほとんどしなかった」「たまにした」「よくした」の4件法で尋ねた。この尺度は、小杉他（2004）の研究で、高い信頼性と3つの事業所で同じ因子構造を示したという交差妥当性が示されている。各因子のCronbachの α 係数は、それぞれ、問題解決（夫： $\alpha=.89$ 、妻： $\alpha=.80$ ）、問題放置（夫： $\alpha=.91$ 、妻： $\alpha=.72$ ）、相談（夫： $\alpha=.79$ 、妻： $\alpha=.80$ ）であった。 α 係数が.70以上の一定の値を示したこと、先行研究において、交差妥当性が示された尺度であることから、小杉他（2004）の因子構造を採用した。それぞれ、1点から4点の得点を付け、因子ごとに平均を求めた。

抑うつ度 抑うつ度を測定するため、Radloff（1977）の「CES-D: the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale」日本語版（島・鹿野・北村・浅井、1985）を使用した。CES-Dは、20項目の抑うつ症状に対し、それらが週のうち、何日あったかを回答するものである。島他（1985）と同様、各項目の症状について、1日未満を0点、1～2日を1点、3～4日を2点、5日以上を3点として回答を求めた。16点がカットオフポイントだとされ、16点以上が抑うつ陽性と判断される。一般成人の健常群においては、約15%が陽性という結果が得られている。Cronbachの α 係数は、夫： $\alpha=.90$ 、妻： $\alpha=.85$ であった。 α 係数が.85以上の高い値を

示し、標準化された尺度であることから、島他(1985)のマニュアル(4項目以内の欠損の場合は平均値を投入し、5項目以上の欠損の場合は、分析から除く)に従い、それぞれの項目の合計得点を求めた。

倫理的配慮

臨床心理学を専攻とする大学教員2名が質問紙の内容について不備や問題がないことを確認した。教員によって内容が確認された質問紙は、3園の園長と保護者会によって配布が許可された。また、質問紙の表紙に、調査の匿名性と、調査は自発的なものであり、強制ではないことを明記した。

結 果

分析においては、SPSS Ver. 16の日本語版を用いた。

対象者の属性

夫の平均年齢は36.21歳($SD=4.77$)、妻の平均年齢は35.25歳($SD=4.21$)、平均の子どもの数は1.50名($SD=0.64$)、夫の週間労働時間の平均は51.49時間($SD=9.63$)、妻の週間労働時間の平均は36.46時間($SD=10.57$)であった。

祖父母と同居しているものは4組(10.0%)、していない組は36組(90.0%)であった。男性は1名の非常勤と1名の無回答を除き(それぞれ2.5%)、38名が常勤(95.0%)であり、職種は、28名(70.0%)が会社員、3名が公務員(7.5%)、5名(12.5%)が自営業、3名(7.5%)が専門職、その他が1名(2.5%)であった。妻の職業形態は、常勤32名(80.0%)、非常勤7名(17.5%)、その他1名(2.5%)であった。妻の職種は、21名(52.5%)が会社員、3名(7.5%)が公務

員、2名(5.0%)が自営業、専門職が9名(22.5%)、パートが3名(7.5%)、その他が2名(5.0%)であった。

本研究において、CES-Dのカットオフポイント(16点)を基準にすると、夫は、11名(27.5%)が抑うつ陽性群、29名(72.5%)が陰性群であった。妻は、10名(25.0%)が抑うつ陽性群、30名(75.0%)が陰性群であった。夫と妻、両方が抑うつ陽性群の夫婦は4組(10.0%)、夫のみが抑うつ陽性群は7組(17.5%)、妻のみが抑うつ陽性群の夫婦は6組(15.0%)、夫と妻両方が陰性群であった夫婦23組(57.5%)であった。島他(1985)の研究における陽性群の割合(約15%)よりは高いが、本研究においては、「(両立に)全く困っていない」対象を除いている。仕事と家庭の両立の困り度を、「全く感じていない」と答えるという対象は、抑うつ度が低いことがうかがわれる。そのことを考慮すると、本研究の対象者は、臨床群が多い特異なサンプルではないことが想定できる。次に、仕事と家庭の両立の困り度に関して述べる。夫で「ほとんど困っていない」と回答したものは20名(50.0%)、「やや困っている」と回答したものは19名(47.5%)、「かなり困っている」と回答したものは1名(2.5%)であった。妻では、「ほとんど困っていない」と回答したものは、9名(20.0%)、「やや困っている」と回答したものは23名(57.5%)、「かなり困っている」と回答したものは8名(20.0%)であった。

各尺度得点の夫婦間における比較

次に、各尺度得点を夫婦間で比較する。本研究では、O'Brien et al. (2009)と同様に、独立変数を夫と妻と置き、対応のある t 検定を行った。南風原・杉

Table 1 用いられた変数の夫婦間比較(夫婦40組)

変 数	夫 ($N=40$)		妻 ($N=40$)		Paired t
	M	SD	M	SD	
両立困り度	2.53	0.55	2.98	0.66	3.15**
家庭から仕事へのNS	2.07	0.53	2.55	0.55	4.93***
PS	2.62	0.57	2.97	0.61	3.51**
仕事から家庭へのNS	2.64	0.52	2.75	0.51	1.05 <i>n.s.</i>
問題解決	2.50	0.62	2.86	0.54	3.19**
問題放置	2.11	0.67	2.18	0.50	0.53 <i>n.s.</i>
相談	1.98	0.68	2.43	0.64	3.35**
抑うつ度	10.98	9.22	11.05	7.44	0.04 <i>n.s.</i>

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

澤・平井(2009)では、夫婦や双子、親子など、はじめから自然発生的な組になっている場合は、マッチングによりブロックが構成された場合や、同じ対象に反復測定が行われた場合と同じように、群間の対応関係があるとしており、対応のある分析を行うことは適切であると判断したためである。

それぞれの変数の平均値と標準偏差、対応のある t 検定の結果を Table 1 に示す。対応のある t 検定の結果、両立困り度 ($p<.01$)、家庭から仕事への NS ($p<.001$)、PS ($p<.01$)、問題解決の頻度 ($p<.01$) と相談の頻度 ($p<.01$) において、妻の得点が夫の得点より有意に高かった。しかし、仕事から家庭への NS、問題放置の頻度、抑うつ度の得点においては、夫と妻の間で有意な差は見られなかった。

各尺度得点の夫婦間における関連

本研究の目的に沿い、まず、これらの変数の夫婦間での関連を Pearson の相関係数を用いて調べた。結果を Table 2 に示す。まず、家庭から仕事への NS ($r=.35, p<.05$)、PS ($r=.44, p<.01$)、抑うつ度 ($r=.41, p<.01$) は、夫と妻で、有意な正の相関を示した。次に、夫の抑うつ度と妻の PS ($r=-.36, p<.05$) には、有意な負の相関が示されたのに対し、妻の抑うつ度と夫の PS ($r=-.18, n.s.$) には、有意な相関が示されなかった。同様に、夫の抑うつ度と妻の問題解決 ($r=-.33, p<.05$)、妻の相談 ($r=-.32, p<.05$) には、有意な負の相関が示されたが、妻の抑うつ度と夫の問題解決 ($r=.15, n.s.$)、夫の相談 ($r=-.04, n.s.$) には有意な相関が示されなかった。次に、夫の PS と妻の仕事から家庭への NS ($r=-.36, p<.05$)、妻の問題解決 ($r=.37, p<.05$) には、有意な正の相関が示された。同様に、夫の仕事から家庭へ

の NS と妻の相談の使用 ($r=-.37, p<.05$) には、有意な負の相関が示された。加えて、夫の問題放置と妻の抑うつ度 ($r=.35, p<.05$) には、有意な正の相関が示された。

重回帰分析

ここまでの分析で、家庭から仕事への NS、PS、および、抑うつ度の得点は、夫と妻の間で有意な正の相関を示した。しかし、相関分析の結果は、分析に用いた他の変数からの影響を受けてしまう。したがって、夫婦間での関連に対して更なる検討を行うために、これら 3 つの変数を従属変数とした重回帰分析を行った。重回帰分析の手法は、ステップワイズ法で、投入の基準となるのは、 F 値 $p \leq .05$ のもの、除去の基準となるものは、 F 値 $\geq .10$ のものである。まず、従属変数として、夫の家庭から仕事への NS、夫の PS、夫の抑うつ度を置き、それぞれの従属変数に対して、7 つの妻の変数（妻の家庭から仕事への NS、PS、仕事から家庭への NS、問題解決、問題放置、相談、抑うつ度）を独立変数として投入した。同様に、従属変数として、妻の家庭から仕事への NS、妻の PS、妻の抑うつ度を置き、それぞれの従属変数に対して、7 つの夫の変数（夫の家庭から仕事への NS、PS、仕事から家庭への NS、問題解決、問題放置、相談、抑うつ度）を独立変数として投入した。

以下、重回帰分析の結果を示していく。夫の家庭から仕事への NS に対しての分析の結果、説明率は 9.8% で、5% 水準で有意であった ($F=5.24, df=1, 38, p<.05$)。妻の家庭から仕事への NS が高ければ高いほど ($\beta=.35, p<.05$)、夫の家庭から仕事への NS は高くなっていた。夫の PS に対しての分析の

Table 2 妻と夫の両立困り度、スピルオーバー、コーピング、抑うつ度の相関分析結果（夫婦 40 組）

	妻 回 答							
	1	2	3	4	5	6	7	8
1 両立困り度	-.10	.19	-.07	.07	-.06	.18	.14	.06
2 家庭から仕事への NS	.19	.35*	-.22	.21	-.09	.08	-.26	.30
3 PS	-.24	-.13	.44**	-.36*	.37*	-.00	.13	-.18
4 仕事から家庭への NS	.14	.28	-.28	.17	-.04	.03	-.37*	.24
5 問題解決	.05	.11	.08	-.13	.26	-.21	-.05	.15
6 問題放置	.15	.09	.11	.01	-.07	-.08	-.16	.35*
7 相談	-.04	.14	.12	-.18	.10	-.17	.15	-.04
8 抑うつ度	.21	-.05	-.36*	.09	-.33*	-.10	-.32*	.41**

* $p<.05$, ** $p<.01$

結果、説明率は 25.8% で、1% 水準で有意であった ($F=7.78, df=2, 37, p<.01$)。妻の PS が高ければ高いほど ($\beta=.39, p<.01$)、妻の問題解決の頻度が多ければ多いほど ($\beta=.33, p<.05$)、夫の PS は高くなっていた。夫の抑うつ度に対しての分析の結果、説明率は 21.6% で、1% 水準で有意であった ($F=6.38, df=2, 37, p<.01$)。妻の抑うつ度が高ければ高いほど ($\beta=.38, p<.01$)、妻の問題解決の頻度が少なければ少ないほど ($\beta=-.30, p<.05$)、夫の抑うつ度は高くなっていた。

妻の家庭から仕事への NS に対しての分析の結果、説明率は 9.8% で、5% 水準で有意であった ($F=5.24, df=1, 38, p<.05$)。夫の家庭から仕事への NS が高くなればなるほど ($\beta=.35, p<.05$)、妻の家庭から仕事への NS は高くなっていた。妻の PS に対しての分析の結果、説明率は 17.0% で、1% 水準で有意であった ($F=8.99, df=1, 38, p<.01$)。夫の PS が高ければ高いほど ($\beta=.44, p<.01$)、妻の PS は高くなっていた。次に、妻の抑うつ度に対しての解析の結果、説明率は 14.6% で、1% 水準で有意であった ($F=7.64, df=1, 38, p<.01$)。夫の抑うつ度が高ければ高いほど ($\beta=.41, p<.01$)、妻の抑うつ度は高くなっていた。

考 察

スピルオーバーとコーピングに関する先行研究との関連

夫婦間の差の検討 本研究では、妻のほうが夫よりも PS と家庭から仕事への NS の得点が高かった。福丸 (2000) の研究では、夫婦に対応関係のない、夫群と妻群の比較において、この結果が示されている。これに対して、夫婦で厳密に対応させた本研究でも、同じ結果が示された。家庭から仕事への悪影響を感じつつ、同時に、両立のポジティブな影響を強く感じる、“共働き夫婦の中の” 妻の姿が明らかになったものであると考える。次に、仕事と家庭のコンフリクトに対するコーピングの頻度を比較した結果、問題解決と相談の頻度において、妻のほうが夫よりも多く用いていた。この結果は、仕事と家庭のコンフリクトに対して、妻のほうが夫よりも、積極的に問題へ取り組み、誰かに相談するというコーピングを行うという姿を示している。福丸 (2000) の結果と重ね合わせてみると、困難を抱えな

がらも、積極的に行動し、相談する働く妻の生き生きした姿が見受けられる。

しかし、本研究は“両立困難”へのコーピングという尋ね方であった。両立困り度に関して、妻のほうを感じていることから、夫はコーピングをしないのではなく、そもそもコーピングする必要性がないという可能性も考えられる。この点に関しては、今後も検討する必要があるだろう。

夫と妻の両立のネガティブな側面とポジティブな側面の関連 次に、スピルオーバーと抑うつ度の関連に関して考察する。家庭から仕事への NS, PS, 抑うつ度の得点は、夫婦で関連した。この結果は、他の変数の影響を統制した、重回帰分析を行っても同様であった。まず、家庭から仕事への NS である。Westman & Vinokur (1998), Westman (2001) は、共有された社会的環境から夫婦の両者に影響を与えるストレッサーを、共通ストレッサー (common stressor) と説明している。家庭から仕事への NS は、家庭風土 (小泉, 2003) や夫婦の意見の不一致の多さ、配偶者からの情緒的サポートが少ないこと (Grzywacz & Marks, 2000) などが要因であるとされている。この結果は、家庭という夫と妻に共通の要因が、共働き夫婦各々の仕事への悪影響となっていることを示しており、共通ストレッサー (Westman & Vinokur, 1998; Westman, 2001) の観点から説明可能であると考ええる。

先行研究では、仕事と家庭のネガティブな側面 (例: 仕事と家庭のコンフリクトの関連: Hammer et al., 1997, 家庭うつ傾向, 仕事うつ傾向, 精神的ストレインの関連: 加藤・金井, 2007) が夫と妻で関連していることを示している。本研究では、加えて、抑うつ度の高さが夫婦で関連を示した。これは、ネガティブな側面の関連を示す先行研究を追証したものである (Hammer et al., 1997; 加藤・金井, 2007)。抑うつ者とその配偶者の間の交互作用についての研究は存在し (Coyne et al., 1987), この理論が共働き夫婦にも当てはまるのではないかと考察できる。つまり、共働き夫婦においても、抑うつ度の高い一方 (例えば、将来へ希望をなくしていたり、絶望感を感じていたり、無気力だったりする対象) との相互作用は、配偶者にも悪影響をもたらすのかもしれない。

同様に、本研究では、両立のポジティブな側面

(PS) が夫と妻で関連することを示した。Crouter (1984), 福丸 (2000) は、家庭と仕事は互いに相互作用し合うシステムで、相互に良い循環をすることが重要であると指摘している。両立のポジティブな側面 (PS) が夫と妻で関連したことは、ポジティブ・スピルオーバーが単に、両立のネガティブな側面の逆転項目ではないことを裏づけている結果である。

分析単位としての夫婦という視点

重回帰分析の結果、妻の問題解決の頻度が少ないれば少ないほど、夫の抑うつ度は高くなる傾向にあり、妻の問題解決の頻度が多ければ多いほど、夫の PS は高くなる傾向にあった。小杉他 (2004) の研究では、自身が行う問題解決の使用頻度の多さと自身の憂うつ感、イライラ感、疲労感などの心理的ストレス反応の少なさの関連を示している。小杉他 (2004) の結果は、積極的なコーピングを頻繁に行うことと、心理的ストレス反応の少なさの関連を示しているだろう。活動的、積極的な妻のコーピングは、本人にとって有効なばかりではなく、夫との相互作用により、Coyne et al. (1987) とは反対の原理で、夫の抑うつ度を下げたり、夫の PS を上げるのかもしれない。

一方、妻の抑うつ度や PS に関しては、夫の行うコーピングの種類や頻度の影響は示されなかった。影響していた変数は、それぞれ、夫の抑うつ度や夫の PS であった。福丸 (2000) の研究によれば、共働き世帯でも妻の負担（家庭から仕事への NS）が高いと示されている。本研究の結果からも、妻のほうが夫よりも両立困り度を強く感じていることがうかがえる。小泉 (1997) は、仕事と母親役割を持つ日本の女性は、母親役割に対する社会規範の強さから、仕事と母親役割間のネガティブ・スピルオーバーが欧米の女性に比べて多く、多重役割によるストレスも多く経験しているのではないかと指摘している。また、中山・福丸・小泉・無藤 (2004) の妊娠期の夫婦を対象とした研究では、妻の妊娠によって仕事を早く切り上げ、かつ家では妻の話にも耳をかたむけるなどの情緒的サポートを行っているという夫自身の自己評価に対して、妻のほうは夫ほどにはそういった変化を感じていないことが示されている。仕事と家庭の両立にコンフリクトを日々強く感じ、それに対してコーピングしている妻の視点から見れば、夫がどのようにコーピングを行っているのかと

いうことは認識されにくいいため、妻自身に影響を与えづらいのかもしれない。

相関分析の結果、妻の相談頻度と夫の仕事から家庭への NS の得点には、有意な負の相関が示された。夫が仕事でのイライラや疲れを家庭へ持ち込んでしまうことにより、妻は仕事と家庭のコンフリクトに対して、夫に相談する機会が減るのかもしれない。この結果は、妻の相談相手としての夫の存在を示唆するものであると考えられる。

これらの結果は、夫に関しては、共働き夫婦の一方のある種のコーピングと、もう一方の両立のネガティブな側面、ポジティブな側面、精神的健康が関連するという結果を示したものである。共働き夫婦におけるコーピングやスピルオーバーを考慮する上で、その配偶者がどのようなコーピングやスピルオーバーしているかについて調べる必要性があることが示されただろう。このことは、まさに Hammer et al. (1997) が指摘した、夫婦を分析単位とした (couple as a unit of analysis) 視点によって明らかにされた点と同等であると考えられる。

本研究からの示唆

本研究は、両立のネガティブな側面（家庭から仕事への NS, 抑うつ度）が夫と妻で関連することを示した。同様に、両立のポジティブな側面 (PS) が関連することも示した。このことは、共働き家庭の、夫か妻、どちらか一方への働きかけ、つまり、抑うつ度を下げたり、両立のポジティブな側面を上げたりするような仕事と家庭の両立支援（サポート）が、配偶者にも活きる可能性を示したものであると考えられる。加藤・金井 (2007) は、夫婦のうち一方の所属組織の対策が、労働者自身のメンタルヘルスに影響を及ぼすのみならず、その配偶者にも影響を及ぼす可能性を示唆している。これに対して、本研究は、“家庭から仕事への” NS が夫婦で関連していることを示しており、どちらか一方への“家庭への”両立支援が他方にも活きる可能性を示唆したと考える。加えて、この結果は、家庭から来る仕事へのイライラや悪影響を感じる夫や妻に対して、家族療法やカップルセラピーなど“家庭への介入”を行う有効性を示す結果であると考えられる。

さらに、個人単位のスピルオーバーの要因検討を行っている先行研究（小泉, 2003; Grzywacz & Marks, 2000）の知見に加えて、本研究は“配偶者

のスピルオーバー”という可能性を付け加えた。本研究が示した、個人のスピルオーバーが、その配偶者のスピルオーバーの要因となっている可能性があるという観点は、先行研究が見逃していた点であると考ええる。

今後の課題

本研究の限界として挙げられるのは、最終的に分析に用いられたのが、共働き夫婦 40 組だったということである。したがって、本研究の知見の一般化には慎重になるべきだと考えられる。これは、本研究が、“共働き”であり、“夫婦ペアで回収”されており、“データにおいて欠損がなく”、“夫と妻どちらも、多かれ少なかれ両立に困難を抱えている”と、二重三重の基準に沿って分析基準を設定したためであると考えられる。本研究では、データのスクリーニングを厳密に行った結果、このようにサンプルが少なくなった。このようなデータ収集、および分析における困難が、この領域における研究の数を少なくさせているのかもしれない。また、福丸(2003b)が指摘したように、本研究においても、もともと家庭と仕事の問題に対する意識が高い人が多いというサンプルの偏りも予想される。また、本研究では、夫と妻どちらかが「(両立に) 全く困っていない」夫婦を分析から除いている。しかし、今後の研究では、仕事と家庭の両立の困り度にギャップがある夫婦内の個人の精神的健康を測定する必要があるかもしれない。以上のような限界を踏まえながらも、夫婦で厳密に対応させた本研究が、多重役割研究、コーピング研究に持つ意味は少なくないと考ええる。

最後に、ポジティブ・スピルオーバーな状況下における夫婦の相互作用に関しては、いまだ研究が深められていない。先行研究では、共感的応答(empathic responding)のような、“相手の視点に立って、物事を見ようとする”ことや“相手の話に耳をかたむけることで、助けようとする”ことが、夫婦間の緊張の低減に有効であるとされている(O'Brien et al., 2009)。このような変数を含めた研究が、ポジティブ・スピルオーバーな状況下における夫婦の相互作用を調べる上でも、また、働く親の両立支援の文脈を考慮する上でも、必要になると考えられる。

謝 辞

本研究は、2010 年度東北大学大学院教育学研究科に修士論文として提出したものに、追加データを加え、加筆・修正したものである。本研究は、日本応用心理学会第 77 回大会、The 2nd regional symposium of CIFA (Consortium of Institutes on Family in the Asian Region) において発表された。

本論文の執筆にあたり、ご指導頂いた東北大学大学院教育学研究科加藤道代教授に深く感謝いたします。また、本論の執筆にあたり、有益なコメントを頂いた東北大学加齢医学研究所スマート・エイジング国際共同研究センター研究員野内類氏、ご協力を頂いた 3 園の園長先生とスタッフの方々、そして、保護者の皆様に御礼申し上げます。

最後に、東日本大震災被災地の皆様に心からお見舞い申し上げます。

引用文献

- Aryee, S., Luk, V., Leung, A., & Lo, S. 1999 Role stressors, interrole conflict, and well-being: The moderating influence of spousal support and coping behaviors among employed parents in Hong Kong. *Journal of Vocational Behavior*, **54**, 259-278.
- Coyne, J. C., Kessler, R. C., Tal, M., Turnbull, J., Wortman, C. B., & Greden, J. F. 1987 Living with a depressed person. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **35**, 347-352.
- Crouter, A. C. 1984 Spillover from family to work: The neglected side of the work-family interface. *Human Relations*, **37**, 425-442.
- 福丸由佳 2000 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関係 家族心理学研究, **14**, 151-162.
- 福丸由佳 2003a 乳幼児を持つ父母における仕事と家庭の多重役割 風間書房
- 福丸由佳 2003b 父親の仕事と家庭の多重役割と抑うつ度—妻の就業の有無による比較 家族心理学研究, **17**, 97-110.
- Greenhaus, J. H., & Beutell, N. J. 1985 Sources of conflict between work and family roles. *Academy of Management Review*, **10**, 76-88.
- Grzywacz, J. G., & Marks, N. F. 2000 Reconceptualizing the work-family interface: An ecological perspective on the correlates of positive and negative spillover between work and family. *Journal of Occupational Health Psychology*, **5**,

- 111-126.
- 南風原朝和・杉澤武俊・平井洋子 2009 心理統計学ワークブック—理解の確認と深化のために 有斐閣
- Hammer, L. B., Allen, E., & Grigsby, T. D. 1997 Work-family conflict in dual-earner couples: Within-individual and crossover effects of work and family. *Journal of Vocational Behavior*, 50, 185-203.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 2006 職業生活が中期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響—妻の職業形態別にみたクロスオーバーの検討 発達心理学研究, 17, 62-72.
- 加藤容子・金井篤子 2006 共働き家庭における仕事家庭両立葛藤への対処行動の効果 心理学研究, 76, 511-518.
- 加藤容子・金井篤子 2007 共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクト—「クロスオーバー効果」と「対処行動の媒介・緩衝効果」の吟味 産業・組織心理学研究, 20, 15-25.
- 小泉智恵 1997 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響 母子研究, 18, 42-59.
- 小泉智恵 2003 仕事と家庭のスピルオーバー尺度の作成 日本心理学会第 67 回大会 発表論文集, 1180.
- 小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則 2001 児童を持つ共働き夫婦における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー—抑うつ, 夫婦関係, 子育てストレスに及ぼす影響 精神保健研究, 47, 65-75.
- 小杉正太郎・田中健吾・大塚泰正・種市康太郎・高田未里・河西真知子・佐藤澄子・島津明人・島津美由紀・白井志之夫・鈴木綾子・山手裕子・米原奈緒 2004 職場ストレススケール改訂版作成の試み (I)—ストレッサー尺度・ストレス反応尺度・コーピング尺度の改定 産業ストレス研究, 11, 175-185.
- 黒澤 泰・加藤道代 2010a 関係性に焦点を当てたコーピング研究の必要性—“Relationship Focused Coping”の示唆するもの 東北大学大学院教育学研究科臨床心理相談室紀要, 8, 77-82.
- 黒澤 泰・加藤道代 2010b 仕事と家庭のスピルオーバーとコーピングの関連—父親と母親の比較から家庭教育研究所紀要, 32, 33-42.
- ラザルス, R. S., Folkman, S., 本明 寛・春木 豊・織田正美 (監訳) 1991 ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究 実務教育出版 (Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress Appraisal, and Coping*. New York: Springer Publishing Company.)
- Matsui, T., Ohsawa, T., & Onglatco, M. L. 1995 Work-family conflict and the stress-buffering effects of husband support and coping behavior among Japanese married working women. *Journal of Vocational Behavior*, 47, 178-192.
- 中山美由紀・福丸由佳・小泉智恵・無藤 隆 2004 ライフスタイルと家族の健康の縦断調査—妊娠中の状況 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 2, 1-7.
- O'Brien, T. B., & DeLongis, A. 1997 Coping with chronic stress: An interpersonal perspective. In Gottlieb, B. H. (Ed.), *Coping with Chronic Stress*. New York: Plenum Press. pp. 161-190.
- O'Brien, T. B., DeLongis, A., Pomakim, G., Puterman, E., & Zwicker, A. 2009 Couples coping with stress: The role of empathic responding. *European Psychologist*, 14, 18-28.
- 太田さつき 2006 多重役割従事と心理的 well-being との結びつき—役割間の関係性を含めた研究 心理学研究, 76, 503-510.
- Radloff, L. 1977 CES-D Scale, A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, 1, 385-401.
- 坂本真士 1998 自己注目と抑うつ—抑うつの発症・維持を説明する 3 段階モデルの提起 心理学評論, 41, 283-302.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 1985 新しい抑うつ性自己尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- ステップ・ファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン「ステップファミリーとは？」(2011 年 1 月 29 日アクセス) (<http://www.saj-stepfamily.org/renew/aboutstep/article/ステップファミリーとは>)
- 渡井いずみ・錦戸典子・村嶋幸代 2006 ワーク・ファミリー・コンフリクト研究の動向—日本人を対象とした研究を中心に 精神保健, 14, 299-303.
- Westman, M., & Vinokur, A. D. 1998 Unraveling the relationship of distress levels within couples: Common stressors, empathic reactions, or crossover via social interaction? *Human Relations*, 51, 137-156.
- Westman, M. 2001 Stress and strain crossover. *Human Relations*, 54, 717-751.

(受稿：2010.9.7, 受理：2011.5.20)